

出演者 からの メッセージ



バンドネオン奏者

早川 純さん

タンゴ日本到来100周年記念特別公演第2弾!!

2月20日(金)午後7時開演〈魅惑の音楽紀行〉 「アルゼンチンタンゴとフォルクローレの世界」について

アルゼンチンタンゴでお馴染みの楽器、バンドネオン。この楽器のルーツは意外にもドイツにある。1840年頃、ドイツの片田舎に住むハインリヒ・バンドなる人物が、携帯用オルガンとして発明したのが始まりだ。この楽器が如何にして海を越えてアルゼンチンに渡ったのか、確かな記録は残っていない。しかし、確かにバンドネオンは海を渡り、ブエノスアイレスに根を下ろし、「タンゴ」という音楽の魂となった。それと同時に、アルゼンチン全域では、むしろタンゴよりもポピュラーな音楽であるフォルクローレでも定着した。

バンドネオンの魅力は、何と言ってもまずその音色にある。蛇腹で息し、時に語るように時に叫ぶように歌うバンドネオン。ある者はその音に郷愁を感じ、ある者は色気を感じ、またある者は救いを感じるだろう。機能的に進化した、オートマ車の様なアコーディオンに比べ、バンドネオンはシンプルなマニュアル車のようだ。不器用ながら、ギアの切替を肌で感じながら、直接音に触れているかのように奏でる。これ程までに人の感覚をダイレクトに表現・体感出来る楽器はなかなか無いだろう。

2月の公演は、アルゼンチンタンゴと、フォルクローレに光を当てた。アルゼンチン音楽の、表と裏。その魅力を知る、きっかけとなるようなコンサートにしたい。

(詳細はP7イベント・講座案内をご覧ください)

‘和食’作っていますか?

「実りの秋」にふさわしい企画『～外国人のための日本料理～一緒に和食をつくきましょう!』が、10月11日(土)に行われました。

たっぷりの昆布とかつおぶしで取ったおだし、大きな擂り鉢でゴリゴリとすった香り豊かなゴマ、お米のとぎ方、豆腐の水切り、ほうれん草の洗い方に至るまで、和食の醍醐味を、岡本治子先生(中原区食生活改善推進員連絡協議会会長)中心に3名の先生方に教えていただきました。

参加したのは、フィリピン、中国、ブラジル、ベトナム、タイ、アメリカ、ボリビア出身の外国人市民や留学生と、国際交流に関心のある日本人市民合わせて21名(男性3名、女性18名)。特に、当日メニューに加わった和菓子のわらび餅に、外国人市民の皆さんは興味津々。使い終わったわらび粉の入っていた袋を手に、メモをしながら先生に何度も質問されていました。



食材や切り方の説明を聞いています



卵焼き、けんちん汁、即席つけもの、赤飯、ほうれん草のごま和え(右上から右回り)



箸の使い方を説明する講師



参加者も実際に料理体験

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の「無形文化遺産」に登録された和食。日本の伝統的な食文化として大切に引き継いでいくためにも、「丁寧に食事を作る」ことを忘れてはいけないと思うひとときでした。

(取材・文:編集ボランティア 相沢明子)